

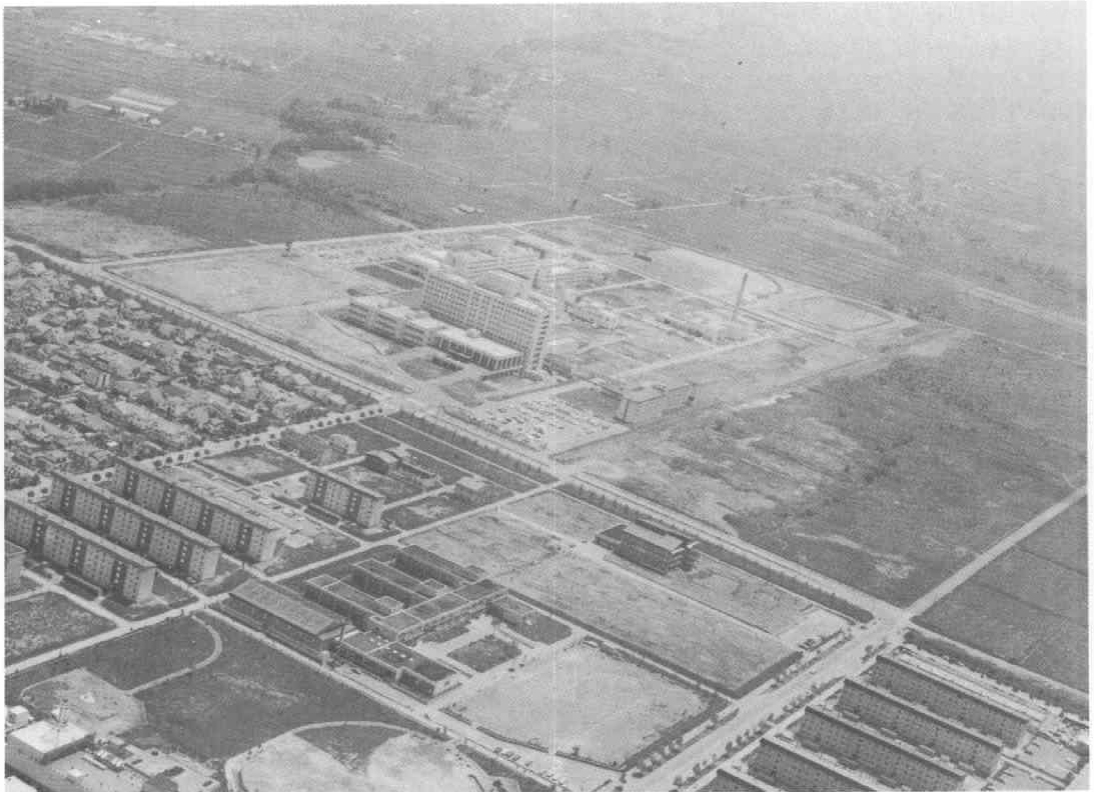
# かぐらおが

## 第 16 号

昭和53年9月1日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



ニュータウンと田園に囲まれた本学

### 内 容

教師の学習.....内田 倅喜... 2	バレーボール部、2連覇に輝く..... 6
日常雑感.....大河原 章... 3	サークル活動関係セミナー..... 7
THE 4 TH MEDICAL COLLEGE FESTIVAL IN ASAHIKAWA... 4	研究室紹介.....加地 隆... 7
医大祭をふり返って.....相馬 光宏... 4	新入生合同グループ研修..... 8
スポーツ医学展を企画して.....堀毛 清史... 5	旭川ロータリークラブよりLL資料受贈..... 8
第25回北海道地区大学体育大会..... 5	窓 外.....並木 正義... 8



# 教師の学習

内田 倅 喜

私も旭川に来てもう5年になろうとしている。本学の学年進行は本年度で完結しようとしており、一方ではまた新しい事態に直面して第二の創設期を迎えようとしている。赴任以来の5年間は以前の経験からすると信じがたい程多くの研究以外の事柄について学習を余儀なくされたという感じが強い。それは入学試験、建物作り、規則作り、組織作り、銭勘定、カリキュラム作りなどである。それらについての現実の寄与は極めて僅かであったのだが、中でもカリキュラム作りとその実現化には最も真剣な学習を余儀なくされた。いまわずかに離れてその軌跡をふりかえる時間を得たが、30年前の私の初心を振り返って、研究生活だけを考えるとこの道に入ったことを思うならばいささか茫然とせざるを得ない。勿論、研究至上主義を称えて確かな研究成果もあげられないと汗顔の至りだから、そんな主張をして以上にあげたもろもろの事に協力しないなどは初めから毛頭考えなかったのは事実である。

25-30年前、私が大学で教育をうけていた頃の教授達は「研究と教育」と言い慣らわしていた。研究している自分とその成果を学生に見せることが即ち教育である、との考え方であり、事実わけのわからないことを一人壇上でしゃべり、そのノートを下宿に帰って読んでもちっとも判らなかつた記憶が多い。現在はむしろ「教育とそして研究」と表現されるのが適当だと、私の亡くなった先生が8-9年前に述べておられた。ここ15年位の私の経験から考えると昔のように「研究と教育」と表現出来るのは大学院学生以上を対象とした場合に限られる様でもある。その一つの実験的証拠は大学教授の月給がその人の卒業年次によるのであって研究業績によるのではないということだろう。従って月給分だけ働くということに限定したとしても、好むと好まざるにと拘らず、教育とその成果を真剣に考えさせられる。アメリカのMITの教師必携と副題のついたyou and your studentsなる小冊子やダートマス医科大学のcollege Bulletinなどを読まざるを得ない現状である。

小冊子の中に次の様なことが述べられている。教育の過程は教師と学生の一種のチームワークである。教師の資格は相手を動かす指導力、教えようとする意欲、教科目に関する知識、近接する他分野との関係に関する知識及び知識を意義深く生きたものとして学生に伝える能力を持つことであるとなっている。一方学生の資格は学ぶ能力と学ぼうとする意欲があることとなっている。チームワークだから両者の資格充分というところで教育過程

が無事進行となるのは論をまたない所だが、教師必携と称えるだけあって前者に対して厳しい。そこに述べられている資格を考えると例年になく暑い夏の最中ながら、汗のひく思いである。この小冊子にはそのほか、学習の目標、授業のやり方、試験の意味とやり方、採点と評価、カウンセリングのやり方などが事細かに述べられており、アメリカの一流大学の教師にも教育に対する認識と学習を余儀なくせしめている。この内容を拳々服膺しないとどうなるかは書いてないので判らないが、学生による教師の評価というのがあるのでうっかり出来ないことは事実であろう。

現在、日本の理科の学生も学校教師の免許証をもらうために教育学の単位をとったり、教生となって実習に行ったりしている。私はそんな単位をとったことはない。この様に考えてみると医学教育とその結果を真剣に考えている人々に較べて私はなお一層の学習を要求されるのではなからうか。そこで私自身の学習態度を反省するならば、昔うけた方法を学生も昔と同じという事実無根の想定のもとに繰り返しているのかも知れない。この態度は実験科学をやっていると自任する私にとって自己矛盾となる。事実の観察とその整理、認識、それに対する解決方法の考按は研究遂行上も必須のことであり、教育面でも同様であろう。それなしには、いずれの面でも成果はあげられない。

教育の目標を考えるならば、その対象が学部学生であろうと、大学院学生であろうと、若い研究者であろうと、はたまた研究者であると自任している私自身を私が教育する場合でも、最も大切なことは問題解決能力の涵養であると考えられる。だとするならば「研究と教育」と表現された往昔も、「教育とそして研究」と表現されるとした現在も大きな相違はないとも思われてくる。この文章の結論などは勿論ない。ここまでの導き方は大変丁寧さを欠いている事も認めることにする。一方ここまできて、大学が出来る前、北大本部の暖房のない寒い部屋で当時創設準備室長であった山田先生との議論を思いだす。教育と研究にいかなる比率で労力を配分すべきかについて幾時間か言い合ったのだが、私の研究75%論は学長の50%論におしきられた。5年間をふりかえてみると文頭に述べた様に研究50%以下に譲歩させられたのが現実の様にも見えるし、いろいろな段階での教育の目標を考えるならばどうでもよい議論であったようにも思える。いまはなつかしい。

(化学 教授)



# 日常雑感

大河原 章

最近の世相は数値至上主義的傾向が強い。数値というのは少し観点を变えて算出するだけで全く異なった意味を持ち得ることは日頃良く経験するところである。悪いことにマスコミがあらゆる数値を金科玉条の如くに掲げ報道するため、社会に一種のケイオスをもたらすことが少なくない。

新設医大(医学部)の増設をみるに、昭和四十五年に秋田大学医学部、北里大学医学部、杏林大学医学部、川崎医科大学の四校が設置されるまで、四十六校であった医学部が、わずか8年間に一挙に七十数校にまで増加した最大の理由は、“国民何人に医師が何名必要である”とした欧米諸国の数値をそのまま鵜呑みにして、机上の計算だけから割り出されたため多分にあるものと思われる、日本の医療の実態や地方都市の実情などはあまり考慮されていない。

大学受験にしても偏差値とかいう耳慣れない数値により、志望校の選択が左右されることがあると聞く。

医学部を志望する受験生の中には、医師は自由業で、経済的に安定し、しかも社会的にも尊敬を受けるという実利と名誉を同時に得られるという理由や、更に自分は医学が本当は好きではないのだが、医学部は偏差値が高いから医学部を受験するという傾向もあると聞く。

毎年春に週刊誌をにぎわす、高校別有名大学合格者数一覧や、高校別医学部合格者数一覧などはこの傾向に一層の拍車をかけ、本人の希望や家庭の環境は無視され、高校の名誉のための犠牲となった秀才高校生の姿をみるようで何とも傷ましい。

偏差値とマスコミに振り廻されている一面を垣間みる思いがする。

数値至上主義的傾向は臨床医学の分野でもみられる。最近では臨床検査手技が発達し、かなりの検査が検査用紙の必要な箇所印を印するだけで可能である。

臨床検査の発達により診断技術が飛躍的に進歩したことは事実であり、医学が医科学としての体裁を一段と整えたことも事実である。しかし反面、医学の自然科学としての面が強調され過ぎる余りに、少なからず混乱している場合もあるように思える。

臨床検査の正常値はあくまで平均値であり、多くの経験から割り出された大切な一つの基準であることは事実であるが、患者の訴えをよく聞き、患者をとっくりと診るよりもまず検査という傾向は、“病人の医者というより病気の医者”となる危険性も包含している。

偏差値に惑わされて医学部を選んだ医学生といい、臨床検査成績至上主義的医者といい、もともと自分達が作り上げた数値に頼り過ぎる余りに、医者の持つ人文的面を忘れ去った、基本的部分が欠落した医師と云わざるを得ない。

来年度卒業する一期生の諸君には是非このことを心深く銘記してほしい。

臨床医学の面ではこのように検査データを重視し、患者の人間性が膨大なデータの谷間に忘れ去られて処理されるのをアメリカ的医学という呼び方があると聞く。

現在の日本の医学教育者の多くは戦後アメリカに留学して、所謂アメリカ的医学を身につけた者が多いからであろうが、現在アメリカでは専門分野に細分化され過ぎた臨床医学の隙間を埋めるホームドクターの育成に懸命である。高い水準に達した医科学者とは別に、もう少し分り易い人間的な一般のお医者さんを育成するプランが真剣に考慮されている。

日本の医療体制の中でもこのようなお医者さんが求められてはいるが、こうしたお医者さんの育成にあたる指導者が現在の医育機関では育ちにくい。

医育機関だけでなく医学界全体の大きな課題であろう。(皮膚科学講座 教授)



## THE 4TH MEDICAL COLLEGE FESTIVAL IN ASAHIKAWA



第4回医大祭は去る6月15日(木)から6月18日(日)の4日間開催され、17日・18日の市民開放日には、5,000名を越える市民の観覧を得ることができ、好評のうちにその幕を閉じました。

今回の医大祭では、医学展のような伝統ある企画に加えて、サークルが中心となって新しい企画が実施され、一層の盛り上がりが見られました。

関係学生諸君の協力により、医大祭の概要及び今回初めて企画されたスポーツ医学展についてのレポートを得ることができましたので御紹介します。(学生課)

### 医大祭をふり返って

相馬 光宏

「翔びたん、いざノ一研ぎすまされた力を携えて」をテーマに、6月15日(木)から4日間にわたって催された第4回医大祭は、前3回の学祭を上回る成果をあげ、大盛況のうちにその幕を閉じました。これも、全学生が「今年で6学年全部がそろい旭医大も名実ともに一人前の医科大学となる年を迎えた。」ことを自覚し、各個人がそれぞれの持ち場で奮闘した結果であると思います。

まず、10日(土)に整形外科の原田助教授を迎えて行なわれた学生向け講演会では、80余名の参加を得、こういう機会ならではの非常に興味あるお話をさせていただくことができました。また、15日(木)の前夜祭では、21組42人という多数の参加者によって行なわれたボートレースや、のど自慢など新しい企画が盛り込まれ、あの広い常磐公園が今までにない盛り上がりで包まれました。16日(金)のソフトボール大会も、史上最高の44チームもの参加ですばらしい大会となり、学生相互、さらには教職員との親睦をはかる上でも大きな意義をもつものだったといえます。また、各サークルも今回の学祭では積極的な取り組みを見せ、サッカー部のスポーツ医学展、硬庭部の初心

者講習会、自動車部のフィギュア大会など、新しい試みが数多くなされ、写真展、美術展などと合わせて、年に1度のサークル活動の発表の場としての学祭の位置づけも確立してきたと言えるでしょう。さらには、医大祭の特徴であり、市民の興味の中心でもある医学展についても、親切な説明が好評を呼び、医学講演会(森山医師会長、黒田教授)とともに、医学知識の普及という意味からも十分に市民の期待に応えることができました。また、日頃忙しさにかまけて見落とされがちな旭川医大の将来について、道北の医療の現状についてといった問題にも、執行委員会、医療研究会の取り組みや、卒後を考える討論会などを通じて考える機会を与えられた人も多いことと思います。そして、最後のディスコパーティーとして企画された後夜祭も、前回までの後夜祭を圧倒的に上回る約200名という参加者を集め最高の盛り上がりの中での閉幕となりました。一般公開日2日間での入場者数は、5,400名を超え、第1回から3,000、3,400、4,500、5,400と順に増えている数を見ても、医大祭が旭川市民の中に年々確実に定着してきていることがうかがえます。

このように多くの成果をあげた第4回医大祭でしたが反省点としてその準備の段階での討論が少なかったということが挙げられます。実行委が4月になってから機能し始めたということから準備期間が短かった上に、昨年度の学祭の総括が不十分だったこともあり、十分な反省に基いて十分な意義討論を重ね質的發展をめざすという手順をふむことができなかったのは残念でした。今年は次回への引き継ぎをスムーズにしようと考えていますが、とにかくマンネリ化を防ぐ為にも「第1回医大祭開催時に於けるように学祭の意義を確かめあった上で、6学年をも含めた全学的盛り上がりの中での医大祭開催」が、次回の課題であるといえましょう。

(第4回学祭実行委員長)



## スポーツ医学展を企画して

堀毛 清史

人類は数10万年来続けてきた大筋肉の労働をここ数十年で小筋肉のものに変え、その結果、日常生活における筋肉活動の再編成を迫られている。

運動が人間の健康にとって有益でかつ必要なものであるという事を、我々は経験的に、あるいは本能的に知っている。実際運動を行う事により爽快さ、充実感、連帯感などを得、より健康状態が高まった、と感じる。

だが気分が良くなったというだけで、本当に高いレベルの健康状態になっているのだろうか？そして運動が健康をもたらすのなら、どの程度のどの様な運動が最も効果的なのか？これらの疑問に答えるためには経験と同時に「科学的な裏づけ」が必要である。

実際、我々はマイナスの影響を与えかねない環境からの刺激に絶えず出会っている。これに対して人々は不安を感じ、ややもすると闇雲に立ち向かおうとする。このような現状の中で、我々は運動の重要性を理論づけ、具体的に実践へ結びつける必要性を強く感じるのである。

運動と医学の関わりは、一般人の健康増進以外に病気の人の運動療法、スポーツマンのための医学という点でも重要である。

日本においてはやたら「根性」が幅をきかし、それで全てが解決するかの様に振るまっている者がいる。また少しでも強く負荷をかけると力がつくと思っている人もいる。トレーニングは多くの人がかこれまでかかって築いてきた経験によるものと科学的根拠に基いてこそ効果的なものができる。これらを無視して「根性」だけで練習しても決して勝利の栄光、成長の喜び、スポーツの楽しさは得られない。これらの事を自覚しつつ、自信をもって積極的に練習に打ち込むのと上から言われて仕方なくするのとの違いを考えるべきであろう。



運動に対する正しい認識と、スポーツを愛する心、それらを力に我々は国民の健康を守り、高めていく者として行動を起こせる。実際にどうすれば少しでも多くの人々がより良い健康状態を獲得し、運動の喜びと向上、成長を得る事ができるのか考えていこう。

運動を余暇に行うのではなく、生活の中に組み入れていこう。共に叫ぼう。「Sports for all」と!!

(スポーツ医学展実行委員会(サッカー部)責任者)

## 第25回 北海道地区大学体育大会



第25回北海道地区大学体育大会は、北見工業大学が当番校となり、7月15日(土)から7月17日(月)までの3日間にわたり、全道40大学約3600名が参加して、北見市内の各競技場で熱戦を繰り広げた。本学からは、8種目(女子弓道はオープン種目)に100名が参加した。

本大会は、準硬式野球部、バレーボール部がベスト4に、バスケットボール部が地区体で初めての決勝トーナメント進出、剣道部門の個人戦で1年の原隆志君が諸先輩を相手に堂々の3位入賞等、全種目に善戦健闘、総合成績(男子の部)で参加40大学中13位であった。

各種目(団体戦)の成績は次のとおりである。

**準硬式野球** 1回戦 旭医大 16-7 旭教大  
2回戦 旭医大 3-2 釧教大  
3回戦(準決勝)道自短 6-5 旭医大

### バスケットボール

(予選) 旭医大 85-71 北工大  
旭医大 91-82 道工大  
(決勝) 1回戦 札教大 87-72 旭医大

### バレーボール

(予選) 旭医大 2-0 帯畜大



(決勝) 1回戦 旭医大 2-0 専修短  
2回戦 旭医大 2-0 北工大  
3回戦(準決勝)北学園 2-1 旭医大

**卓球**(予選) 道工大 3-0 旭医大  
旭医大 3-0 道都大

※ 決勝トーナメント進出道工大

**柔道** 1回戦 函教大 2-2 旭医大  
(代表)  
**剣道**(予選) 旭教大 4-3 旭医大  
旭医大 4-2 北星園

※ 決勝トーナメント進出旭教大

弓道 (男子) 12大学中、11位  
(女子) 6大学中、4位

(学生課)



## バレーボール部

# 2連覇に輝く!



—第21回東日本医科学生総合体育大会夏季大会—

第21回東医体夏季大会は、日本医科大学が主管大学となり7月20日から都内の会場を中心に若さあふれる熱戦が始まった。

**7月23日** バドミントン(東海大学体育館)観戦。男子は順天堂大学を破り2回戦へ進出。2回戦の相手は強豪岩手医大、食いさがり及ばず敗れる。女子は独協医大に完敗。柔道では大木康生君が個人戦重量級で堂々3位。

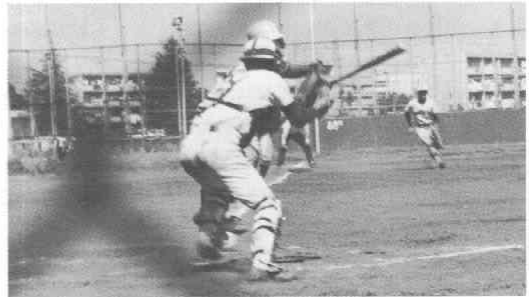
**7月24日** 今日の観戦は準硬式野球。1回戦埼玉医科大学を7x-0のスコアで退ける。福島大会に続いて今年も好スタートを切った。球場を後に弓道会場へ引き返す。明治神宮至誠館に着くと、もう1本、射、と威勢のいいかけ声がとびかい、団体戦前半の射技中だ。わが医大は72射中36中で第4位、明日の追い上げを期待。

**7月25日** 弓道会場へ。明治神宮の森の木々にすっぽりと囲まれ、すばらしい環境と会場で後半の射技の真った

だ中。……「的中てるのはほんとうに難しい」とつぶやきがきこえた。後半は一步後退したが120射中56中で5位と頑張る。

**7月26日** 弓道個人戦で、3年高橋真理子さんが射技優秀賞を受賞。準硬式野球は、打倒旭川と雪辱に燃える筑波大学を2-1で退ける。

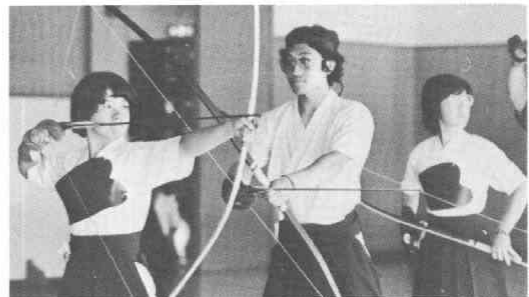
**7月27日** いよいよバレーボールの開始。1回戦東海大学を軽く一蹴、身長差と技術力で相当いけるという感じを持った。その後は期待通り、対戦相手を撃破し、昨年に続き2年連続優勝・全医体出場の快挙を成しとげた。



(対北大) 4回表スクイズ失敗ノ3塁走者タッチアウト

昨日、昭和大学を接戦で下し準決勝に進出した準硬式野球は、北大藤井投手のカーブを打てず0-3と完敗した。

【総評】 今年も、各クラブの活躍が目立った。全学年がそろい練習量、方法ともに充実させてきた結果が実りはじめたと思う。バスケのベスト4、陸上競技は1年小黒君三段跳2位、走高跳3位、3年稲尾君は円盤投3位と頑張り総合6位、空手道奮起してベスト8、サッカー1回戦突破、硬式庭球は男子が惜敗したが、女子は東大を破る。12種目に205名が参加した暑い大会は、



(個人戦射技)「無我、冴えた心」

総合成績33得点17位で幕を閉じた。

燃え尽きた情熱が静かに収束し、厳しい冬をくぐりぬけて、来夏はどんな炎を燃やすかたのしみだ。

(学生課)



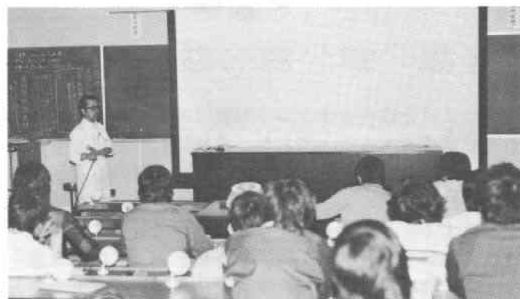
## サークル活動関係セミナー

昭和53年度サークル活動関係セミナーは、ラグビー部、卓球部、スキー部、剣道部、硬式テニス部等、13サークルの代表者の出席を得て、去る6月7日(水)午後1時から第5講義室において開催されました。

本セミナーは、サークル構成員が救急処置について必要な知識を得るとともに、サークル活動及び課外活動施設等についてサークル相互及び各サークルと学生課の相互理解を深めることを目的としたものです。

セミナーでは、開会挨拶の後、サークル代表から趣旨の説明があり、引き続き「サークル活動の諸問題」と題して各サークルの代表者によって討論が行われ、主として課外活動施設について、(1)体育館の床の改修、(2)サッカーゴール前の基準点の改修、(3)野球場の整備、(4)移動式ベンチの配置、(5)武道場の新設等23項目にわたる要望がまとめられ、午後2時20分からの学生課との懇談会に提出されました。

懇談の後、学生課から「附属病院の利用の仕方」と「課外活動関係施設の利用」と題して、(1)健康保険証(又



は遠隔地被扶養者証)と印章の携帯、(2)合宿研修所の利用促進及び体育館更衣ロッカーの定期清掃について説明があり、休憩をはきんで、スポーツ外傷の種類、原因、予防についての講演が行われました。

講演では佐藤邦忠教官(整形外科学講座)から、打撲、捻挫、骨折、脱臼、こむら返り等の項目毎にスライドを使用した説明が行われ、またトレーニング方法としての免飛びの問題点や、スケートで切断した指の縫合事例が述べられました。

本セミナーは他の行事との関係上、十分な準備期間を設けることができなかつたこともあり、多分に試行的なものとなりましたが、参加した各サークルの責任者からは、トレーニング法についての講演や救急処置についての実習を望む声も多く、これらの要望がサークル間で取りまとめられ、次回以降の企画に反映させることが望まれます。

(学生課)

## 研究室紹介

■ 解剖学第二講座 ■ 加地 隆

本研究室の中心テーマは脳の中にある松果体という臓器の構造と機能の解明である。形態学でありながら構造の動態を計量的に追究するのが本研究室のユニークな点である。松果体はインドールアミンを多量に含む内分泌腺で、その活動は光刺激によって影響を受け、著明な日内リズムを示し、頸部交感神経からの神経終末がその調節に重要な役割を演ずることが明らかにされ、我々も形態学の立場からこれらの発展に寄与してきた。しかしながら松果体の電子顕微鏡レベルでの構造あるいはそのホルモンが何でどこにどのように作用しているかなどまだ不明な点が多く、胸腺のつぎに解明されるべき謎は松果体であると注目されている。

松嶋教授は研究の虫で、最初の頃は朝7時から夜7時まで、今は来られる時間は1時間おそいが帰られる時間も1時間おそく依然として毎日びっしり陣頭指揮で研究室を引張っておられる。教授は松果体の電顕の草分けでその電顕写真は留学先のReiter教授が思わず写真にキスをした程の美しさである。留学中の仕事、けっ歯類松果体の微細構造を続ける一方、松果体の交感神経終末の日内リズムおよび種々の実験条件下での変化、また最近では松果体細胞の微細構造の変化を寒冷などの実験条件下でしらべている。長年の研究が認められ、依頼原稿、国内外でのシンポジウムでの発表が相次ぎ意気益々盛んである。向助手は持前の粘り強さを生かして交感神経終末の小型小胞数の変化を系統的に追究中。森沢助手は花から花へとテーマは変わるが器用にこなして現在は松果体細胞の微細構造の日内リズムを検索中。東崎事務官(旧姓菅沢)はタイプ、事務処理また電顕写真の処理など実に沢山の仕事を手際よく処理し、研究室の陰の功労者として感謝されている。三人ともハードワークにもかかわらず容色少しも衰えを見せない。私は組織化学的に松果体細胞のグリコゲンとその日内リズムの調節機序・種差などの諸性質を系統的に明らかにしてきた。また、電顕下で松果体細胞の顆粒小胞数が従来松果体ホルモンとも考えられてきたメラトニンとはパターンの異なる、グリコゲン量と同様の日内リズムを示すという重要発見に恵まれ、アメリカ解剖学会に発表してきた。Quay教授との協同研究では、交感神経副腎髄質系とその日内リズム・ストレス反応に及ぼす松果体の影響を、髄質細胞とそれへのコリン作働性神経終末の微細構造を指標としてしらべているが、松果体除去によってリズムのパターンが変化するという成績を得て今後の発展が期待されている。

最近しばしば外国の研究者達によって我々の論文が引用されるようになり、松果体の形態学では自他ともに許す国際的な研究室となってきた。成果を受け継ぎ更に発展させてくれる若い人達の加入を待っています。

(解剖学第二講座 助教授)

## 新入生合同グループ研修

昭和53年度新入生合同グループ研修は、好天に恵まれた4月22日、23日の両日、第1学年学生98名、グループ担任10名、学年担当等が参加し、層雲峡温泉ホテル層雲において行われました。

2台のバスに分乗した参加者は、午後2時30分に会場に到着し、翌日午後3時の帰迄まで、隣人紹介、グループ別懇談、懇親会、講演、レクリエーション、観光を通して親睦を深めました。

本研修は、新入生諸君が、一日も早く豊かな学園生活を送ることができるように、参加者相互のコミュニケーションの円滑な進展を図るものですが、下記アンケートに見られるように、概ね当初の目的を達成したようです。

### 新入生合同グループ研修アンケート

グループ・クラスの交流が図られましたか。

図られた (77%)	何ともいえない (19%)	2%	2%	図られない 無記入
		2%	2%	

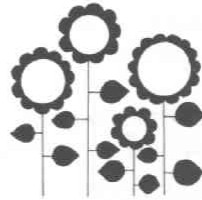
(学生課)

## 旭川ロータリークラブよりLL資料受贈

このたび、旭川ロータリークラブより教職員・学生用の教材として、LL資料「グローリア・アドバンスト英会話教育講座」が本学に寄贈された。この資料は、世界最大の教育図書出版社として、各種の百科事典・美術書・科学書等を出版しているグローリア社より発行されたもので、カセットテープ62巻、テキスト7冊、辞典2冊からなっている。

特長は、自習によって英語をマスターするための上級学習コースで、テープを聞いているうちに自然に英語が耳に慣れるように構成され、教師の声を学習者がそっくりまねてくり返す学習法と、教師の質問に対して学習者が答える学習法が基本となっている。

(図書課)



## 窓外



並木正義

なにを書いてもよいという条件でこの欄を引き受けた。窓外の本来の意味も意図も私は知らない。ただ文字通り勝手に解釈し、窓外の欄に「窓内」を書くことにした。つまり旭川医大の窓内にある身近な事柄をいくつかとりあげ、述べてみようと思う。このようなことが小誌かぐらおかには欠けているからである。

### — 大学祭の展示と誤字 —

まずこれについて、あまり時期遅れにならないうちに書いておこう。

51年の大学祭の展示には15の誤字があった。それが52年には8つ、今年は2つに減った。結構なことであり、私の注意を守ってくれたことを嬉しく思う。

昨年の大学祭のときである。あるグループの学生が途中まで書いた展示の紙を持って相談に来た。その紙にはすでに3つの誤字があった。そのとき私は、大学祭の展示に誤字だけは書かないように、誤字の数はその大学の学生のレベルを示すものだからと注意した。そして、私のサイン入りの用字用語小辞典をそのグループの学生達に贈った。ともかく医者になるものは誤字を書かないようにつとめ、たえず辞書をひいて正しい字を書くこ

と、つまり正確をきすという習慣づけが医者にとってきわめて重要である旨を話した。それでもこの年は全体として8つの誤字があった。このことが今年の担当学年に伝わっていたとみえ、今回は誤字が2つと非常に減少した。要するに心がければできるということである。

この小辞典は、52年の正月に新春を期して誤字を書くという意味を含めて、教職員達全員に贈ったものである。60冊ほど取り寄せたのが少し残っていたので、これを学生にプレゼントしたわけである。ところがその後、各学年からサイン入りの辞典だけもらいにくる学生がいるため、あらたにまた取り寄せた。

医者には紹介患者について返事を書くという仕事がある。この場合、偉そうなことを書いても誤字や滑稽な当て字があったり、目上の人に対する言葉の使い方も知らないようでは、はなしにならないし、はずかしい。手紙というものは、その人の知識・教養・人間性をよくあらわすものである。それだけに細心の注意をもって書かなければならない。

今の若い人は、大学を出ても手紙ひとつろくに書けないとよくいわれる。先日もL特急に乗り合せたどこかの大学生が、座席につくなり天才バカボンとマーガレットという漫画の本を読みだしたのを見て、なるほど、これでは満足な手紙も書けないだろうと思った。しかし、医者になるものはこれでは困るのである。手紙くらいは、はずかしくないものを書けるようになってほしい。それにはふだんからの心がけが大事である。すでに医者になっているものは、さらに厳しい自覚が必要であることは言うまでもない。

(内科学第三講座 教授)